五升庵文子 巻五

蝶夢和尚文集巻第五目録

遠江の記　秋好雲紀行
四国紀行の記　東富士紀行

ふしのゝ山ゑとてうほの寺江の国まこゝろ
の書ゆゑ旅ゝゝもれぬほるはゝゝあ春こゝゝれまてて入
野の江れもゝゝ行村ゝし方壺とゝやう仏ゑ宮ゝからゝあ
ゝし旅のあゝれをゝゆまゝゝしをゝこゝてゝゝ所ゑ春のす
まひのいゝやゝまゝゝ一春のゝゝ春ゝゝのゝ春ゝ江
のむゝ陸江寺といふてゝゝ具しまゝて面れやゝわゝれを
ほゝのゝもゝ布もゝゝゝ春しゝ仏ゆゝ旅の名れせんゑへ
な九方よれおくゝゝゝゝゝゝ春れゝて登ゝもいゝゑ物ゝ

いゝゝ銭あゝれをゝゝ人ていゝゝゝの江評やゝすれもあゝ
て仕いゝ所ほゝし八半ゝゝゝゝゝとゝやゝのをゝあゝむに
ゝゝもゝ杉ゝ見て様行ゝ通し江のゝゝゝんわゝして面ゝ言
なゝゝゝていゝゝ人はをゝゝゝゝわなゝ人ある物軒ゝ
岩のゝ人ほゝゝゝ所ゝれゝ人字物ゝは戸おしあゝて入ゝ
ゝ春ゝの日ゝゝなゝゝわ前九時て江のあゝゝゝゝ所ゝ人ゝ
杉ゝのゝゝゝ乾はゝほゝゝゝゝし上ゝゝゝ人字ゝ士の言名
ゝ杉あゝゝゝゝゝ人ゝゝゝ人ゝゝゝゝほゝゝ面のゝゝゝ

さて私不器ものうつ中より不二の山
江戸ハ霧のおほれもまてし芝はなる繁ゝあわれかうやうの
景色ハ大うゝ新まてハ祝儀おもあるもの尉殿原風雅ものも
のくうつ一殿ものゝ原ものゝ秋つゝ九月ゝゝ
うゝくもるめ雲るもあるしの秋ゝいてゝくゝはうゝゝ新
のゝ乳乃はゝゝゝ秋理いゝゝこの江より舟ゝして演秋れ
橋ゝ雲ゝ使ゝうゝほゝゝあゝゝ浦しゝんゝゝふゝゝ弁と
うゝまゝゝ秋ゝ雲ゝの人ゝゝにあれひせん舟ゝうゝあひ

せゝとひ秋ゝて隆ゝあゝゝゝゝゝゝ伯級なゝれ
とゝるまゝゝひ入まゝゝせけいめいせしゝハ河のうしみかうの表
乃弁せうゝうゝなゝいゝまゝて拾人の料ゝハゝ事なし
鶴なゝきに機ゝまゝれハ帆ゝあゝて棹ゝのゝゝゝゝし九溝
出ゝる毎ゝ秋ゝゝは乃ゝゝ溝らゝゝなゝうゝしゝろゝ不ゝ表の
やゝ乃ゝ秋ゝゝゝふゝゝむゝふゝゝゝゝおゝおゝゝあゝ原しゝゝゝゝゝ
道ゝのゝは記ゝゝゝゝゝゝゝあひゝゝゝゝて乃ゝゝゝゝゝゝゝ
秋ゝゝゝゝの弁坂ゝゝゝゝ原ハゝゝ表ゝ原なゝあゝゝゝゝ

須磨の橋づくしの驛よりわたりきる松原ありて水うみを
ながめやりて行きわたる海の岸入る所わたりもし橋なりし
所の橋ありしなどのかたりぐさにもなきけしきなるこを
若人はなほ思ひ出でらるべし一二を書きかたりつゝ
舟にとまれの日記は　松のうゝ波いとうしろ九あり波た
うたて入江のいろなる海もとゝもの毎なる九松原を
まる中より波のよせうち寄せいろ〳〵れをのこしみえて
ゆくゝ松のもとよりはいとゝ多くて伊勢

海にて　須磨の浦にて松もしろき所なる波
あらよせの海ちかくなる水うみの岸にあるうちも
なるしとゝ松ひくまゝる松の木ちかくかゝり
海をゆくは　橋のしたはしの岸ふるゝ水をう
ゝしとなりなれ松をはるゝ風はかゝ所をゝえて
とゝもまゝもとゝろ大なる霧中はれ行くは佛ゝ水
うゝ見れば波とはるゝようの出て波の色は水色新
まの所あて海ひろ九をなりて風はをゝたて

東ハ并紀りニ　南ハ潮ハ海あり漁舟波ニうかふ小
まて舟ともあまた人家きしにつらなり松原のあひく　さき紀
遠くきしいて松さましく生つゝき荒きまかはむせふ
松のはゝき波のおとくつれもきく　わするゝし
海ハ東ハ　北海ニ湖回一覧も紀氣呑両波瀾
まことのことなる代ゝのまゝ人々の橋ハさうれなし　さの
松原しろ伝ミ并城もの景色よくみしをとゝあくかく
し橋のうへし子もしも夜しあかるゝ塩甚清ハの

紀の橋のこほれるさとを見て
　中ゆきて松ししまゆぬおゆきになる浦なの　ちりをみせん
蒼ふきの橋めの紀のはまの名の橋下り時ハ黒木をゆる
しらわしらのうはゝあゆくなりし舟まくみわたる
また橋の焼るるもあかる海千まとの名所東よ浦の
はしをわたるもとてみるにいまやゝなるれハ
　水の上にかゝる海の橋も焼まるあらきけつはやふりて　さわるも
かくれ九の月ハ間よきみしれるあかしうれなほ甚

橋本ちかき世まではわたりし浜名の橋の記に
　応行る紀ハとほつあふみ浜名の郡ありしかなきぬ
とそよみ人かさる浜名のちなみまでつゞきぬる大浪の害
によりて崩されて今なるこの松原の橋もいづち行
らむしあらずなりて今其世には松原のあとしある程を今切
のわたりとて三十町あまり潮うちよせて水うみとなりて
なりて大海より入来れる浪に往来の舟やすらひありとて
公よりは数多の杭の木を海の中にうち並べ給ひて其

波の荒きを防ぐ為にいつとなく杭のもとには寄せ来る藻
のあつまりて洲となりてそのうへに松生ひ茂りたるをみんとはかりて
むかしの浜名の松原とかく称へし両所おもひぬ一木の中
を旅人の往来に舟ハ水をわたるこころよしいふ橋
思ひやしあはれハ今ハ新居の渡橋本の里よりも西り
かきりしものとなりて橋さしとそしるさる
　橋守もなくして渡るをわたるね
とて浜名にいひ出でしは今よりもむかしなかりし其所の

そのはし見れは行へ入る雲　錦をまみ　蓬江

毎此中の往きもかへるも出せる八
橋中し　松のさきれは一つ手に　乾升
浪の名流して　鶴の橋はし雅　麦白
橋の華てそのあけむもちよ帰る　うわ　方壺

あすは向きてゆくも景色ことくさま見とれぬ海
つるた門いつもしく打ぬまし八形みちの宮の戸し橋本
八須ゑのをしも花まてむかし八海道の中まても一と遊ひ

の名かわし一所より東海に於橋本駅遊女等群参
有盤多雖物之梶原景時

ちしきのさゝみまて何のわきまつきれに玉のみに
苦にそらか河のなれてたきみもと梶原
連れし給ひし深きに仕縁なるの法なりやよ
とのみ給ふ梶原景時のみかあてて守わるといふ
こゝに角田一番の歌とておもん後ゑの懐紙にしな
きしつてさかへ八足よりかへ歩めとせんかと舟間まさきみて

小人見大人見て夫村橋をわたりいつをとよぶまでさ行る小
舟おれうをみて春は海よりの春は山もまたせらるる鶯
ちの見なるまゝよりまた春は山はまた人の立て竿よひと
つ釣をさして水辺よりをのあるを見てつるまて
をあるを鶯すをれるわまは国こまてうけわまとその花
ハらるを深うくしらふしもやらのサはなれハ春や、
春の九は乳うを過しと物うきをうをふきて海の松もて
緑のきわらいさ春ふやうまてを舟のと静なるをかちけ

とあうハ一人しをらてうちをあなわをへて宇陪遊日
せんをも世ををいらしかくを宇のをさはをを加辰と
うをの同一友をを友をを事もを秋らの興をやと思ふ
とう九ををうち舟ハ鶯をは秋浦よりまて本興ををうう
ドうをををを舟一庭康てこの法華寺の松を畫付たまふ
歌う
ををいうををわを屋の屋ををををとく八雲の説法の座を和
ありをる
うを秋の通の紀をあれを行よわ寺を入ると二町行右

大きなる樹の枝ありてはのうへに生田の杜のうへに
まくらとしたりとぞいふ門は常霊山の額をかゝ
せ給ひ八の法華の常在霊鷲山の文よりわりたりと云
うるなり

このやうにさうろうたち飛と書たのこそ
仏のおしへ法華経仏のこゝろまことにうるはしく
深理あるとあらはしあるゆゑに法華経
法華経よりあるを

十

あるうの法華経を頂戴してうるはれ　ナ壺
ふたりて拾ひおくるある法華経　君は
ちるれ之花は法華経人なし　斗六
比浦八幡宮はたしるるあるとかゝ彩ふらるゝ浦
の杜をうるはしく九法華ようとまして杜の樹をあらはは
とくに田畠をうるの風をあらはしてあれりうるはく入出の浦てえ
して正大寺のの杜ら山ら海のとらつ浦のとそ名ちたる
岩田の江ちよ大和沙の江とうるう寺社の樹をはけ
うるは

明日八とそうあり笑うれらるるなるべくの事れ日
よ波の立つ紙いまるべくはいたれを波のそなる
尺もらるるしつねなるべくなわるし波濤酷のたりやう
うなりて発さるし

舵なるべくなるべくて櫂拍

やもしと海のとまるしかたるし　夏白
あらやよ新人もなるべくまた　斗山
舟そうあるべくるべくるべくたるを　才春

十一

宮橋よ要れるつあるをるるるるるるるるて礫宮とい
ちるを紀ねるつくるるるるるれ湖の中よりのたるて石
拔るるるるなるを形るるるるるるるるるるるるるに
寺番るるる梅時るるるのやるるいるるるるるるの中よ
乗辻るるを尺るるるるるるるるるるるるるるるるる
とるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる毎
八出るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

祭まつりの日は伊勢の神領神戸の住なるもの
毎年にてうまを神の御の一色あり国幸といふ里より八神
来たりまつるとのあるてうまの数の十一にて
のうまをうしくいもねしーーはれ中より麻をうゑ布
より織なして伊勢へもちまゐらせなん神衣祭
より三河赤引の糸調糸もて出衣縫作といひまつり八伊勢
屋をて三河の国によりさる物なるとゆの家といふ里
よりあり所にて八尊新物なるもの神衣料なるべし

今年の大まつりの祭をもとなんまつる須賀の作
いふ物をてうして今よりまつる大神宮御寺と
寺あり菊園寺といひてゆもある寺なるまつる物
代といふ里の名あり和名抄に贄代の郡名
あるよいにあれとれるなる所へ八郡里人八郡四郡
大将の御をいふ化をを射る勅宣に弱ひ名地なれ
かくなるといひてもなるの八宝作くの
料に言せられし地を花垣の郡といふ言名もあり

不の鼻をさし[illegible]る猪牟礼とゝひし兵ちこの名つけたる
なわゝそもちるまあるもちる猪鼻井伊名の名あまはさい
ひるあや三ケはゝ里あわいるあるうなゝ名し榛岡の国
まゝう三ケ月とゝつ不ふあるゝまこのわるうりてゝよ祇
ゝ社とけふ所風のあの西門ゝ舟を入まんハたるあ浦し
と猪れのむつうれを捨ゝまなるなあ砂風ゝゝよゝ舟を
お事ゝ祇いちゝゝ九ゝゝゝ三里あるあの海ゝゝとゝひ
さハゝまゝたゝゝて友ゝ寺ゝ九ゝゝハ海の中へつとさし

出てるゝ海ゝて寺ハ山のなゝゝあるゝあゝの名ゝあ赤さ岩
ゝハゝてわゝて言ゝくゝけてさゝもあゝあゝてゝうゝゝの
さなのあゝえもいつあ松老ゝゝ平あて海ゝるゝやうなあ
人ゝてゝの名ゝ屋ゝゝ屋ゝ平の牡ゝつ法ゝつてい
ゝハゝなゝ名わゝゝに保のあゝ此ものゝうゝつまつむ
ゝう此入江を兼実の江ゝゝて兼実ゝ此奥あゝ名なゝおく
乃ゝゝ此ゝを引佐ゝゝ事ゝ佐ゝゝ引佐新のゝなまほし
藁城流ゝく永此江ゝ入ゝまゝ引佐細江ゝゝゝかゝの

人の云ハ先むかしハ此江の細く長けれハ細江とていふものを
とありけれハ古歌多き所と申せし 堯孝法印比所を詠めり

河とてハいさしらぬ細江のあたりこゝろ残して帰る遠

このなかくもよくもちなかりしまやまかるハ。光廣大納言の
東の道の記にハ引佐坂と濱松の間阿波たのたかに井伊谷
地頭の所領かなる あまたあれハ佐細江といふてハ因なく
作るとも越さへわれにも所のこゝろなるはゐまたさし

名はかりハ人もたむけにかたらぬいはてなき細江を
とふ人もなき

かゝるあらぬ所を人のまよひしやらうかうしそのおく
此方に井伊の谷あり建武のころほひハ妻江の介
なる人志深くして住ける所まて井の介とて世にほひ
まうまのくちあけるものぬなりけるか吉野の内裏
に二なく仕へまゐらせける中にも宗良親王此所に
法府をうつさせ給ひし叙井伊の妹にあはせて子法
親王の御こゝろある介か女を法子にまゐらせしく法之
なりてよろ将軍此事は法せしとかやそのあとは奥れ

ひとりの里人あり一族奥ゆかしく人あも
そのころの中務沼の住人と同じ吉野の先帝妃宣
旨を受け御所に住みて御所の方角
てもわろかりけるにて御所の方角
きとしたりしかさ大きくまとまりたる銭六百
帰依し奉り一宇を建て信心し御所に
住みもろしおそれし時天台の方角をとりつかし
場おを設しおのとあわしうハうまにかりて寺を

方角とゆかせたりひそかにもめてうとをさきさ寺を
そおゆきくそて東の方を回ハ呉竹の江西れ
のうはたえ目のえ面ハ山吹なとえハ
おうひもそうねへくいたえ山なる名をしとおもも
きううの西流ゆうの方流ようつせ一銭で昔
あうすよ御ゆとうの一所ようの嶽寺ようとうしゆ水うえのは
うわれ第一の業地なう一おはうの流のひろされる入
ことをまうあうわ東西四里ようく南八里ある丸

大海なわかしこ方よなるこひこちあおのれらうさろ
よわまうみうれのこいナよ國の中よ寺ろ高なしと
ワしみちの九乃拍子よわ天れそしこ伊勢俤一下を
そしそろつのこくこんあわまうらうかろこんとこれこと
いつなうわれろなる兎多さ系て人民うは代ようう
まれ出て母ちくうる氣見のるとものるとろこ人とね
浦らて休そろこあわくこれはなる丈かるねは海う身
のやすき見日出なれ拍ことあうるれと完古る近生

夫

江あわとてちろ法海うへ意さ江あるをとほつあ
ちうみと國の名ましも付さ色ろまひくそこしのれちろ
けなろしあるやうあ弄と見日ぬる八見れあろうなろ
色てろいろちなはぬをを覚へるそ遊江のうこハ
意見、記よなるわるまてやられさ寺ろ丈人も彩
通氏弦日てなろ兎寺よ寺の体よ代寺江の勢をへ
よをていてさをろ、東法をれちよくるあなる
ら見ハ寺賀の関寅ちハあ利の舞れよもわ法

知るるあぢはひなれハ道ゆく人のうゑをたゝしめ九
月もみぢのまれなるころいとあてにさかりおろ
うるもむべしその景をなぞらへて哥をう
つるに人〻くハまほしも酒をそそいて吉日をそらひすれは
とらうひかはをあるともあいなくほんぢやうなう
やはもうまぬちやうのまとよまする興さめて
毋よりわのまをやゝ待るれのふれなまゝ宵のは
とれおほつかなく海はれおもてらんなもあるに決れ

新のちゝ考さ出るはいまゝ侍なわらは
いさもひやうあれ考てゝ丈
其の間　弁ハ

ふるしをぬむつゝうゑあ市はまれ東塚爰幻のひゝ足
宣古の花はうわなるゝ考にの乃鳳まち代国
学ぢ長寺のひゝくよりて考ゝ球ふ爰乃わ
足の宣白あなひゝ足球ふいさなるゝ井ゝセ
ゝゝハ一はゝのひ乃まゝひゝあゝて乃せゝ陸

ゐる所の花をたつねまゐらせなむおもむし　増巻
乃いほねりし玉江のあしの花あれとこゝろみなれ
あをりかへるさ旅かことは志るきあいけれ記よ流るゝよ
玉江のあしの一丘一壑自入而題とて　いまかれらえ
玉江入望の江こゝの　かすみめなれ
方壺　半そふ

秋好む紀行

秋好む心のあまりに足の衰のあやしき入日しく紫の
志らゆかひより旅立ちうちはれて出たる七月十二日しは隠
大江山のふもとはあまりてひけうあひぬれはちるひはあまたうき
海の西の方にあらわれてわたしとかくしめあつかにいで流の
四方に湖のちとせは水のつれてかち人はりあやまりし
以まは那須きて少く白く小那の山の楼閣小京了
出て山の上山つ分入に宝の人のいはしにきの山の
此頃の所く水は扇を持ちて流しぬきまし出らるの

せまれるうつよ馬ゆいて乳小原女炭売りて小野
なるあしきもちりあくを通るにあはれやうー小原を過
伊香立の谷より入るにいとや近江の国なる谷より初
恩院しるべる寺あり七堂伽藍の礼きたる初恩院も
住持の記して物よりきこえうかくこえうー大師の本像と
及ひくるの山うかくたる三尺の生木秋なる歟ー寺あ
る庭の辺にて寺記道場ありて大谷山義門寺と
いふ遠よ物とも那れくはるに厩雑穢土欣求
浄土の人入行つて家あり
かくてこそ会佛ならせ　秋の雲

山を湖のかくへりたる西方のうしろ山をいくつ
入りのかくり西方のうしろ山をいくつ
年逢うは情ふるかくりかくるる
笑止やし人いよ笠のかくして　尼全
和歌の浦入板井のよりうまやよりて有るかれ衣を
十三日より最近あり湖うかくて陸あるかくる
漢の尊多景湯七のよりゆ比良の旅山をたる名月
かくかくかくかくしの吹よりやうにまるかくおも
かくかくかくかくの室の名れいはるかくて山より湖の行
きて小松のきひはきくまるまのかくひかせかくせ

ちよの山うつひよりの白ゆ指りかしやうあん流あ事
ゑ布の流れいと瀑布こゝ言ふこ人のこよ言のと
かの文ゆにられるやかゝ紙ゑ窪岩いゆあるいい
ゆしにまゝうて水うたゝ仕よ海迄ゆ言ゝゆの湖
あう白き流ゝて通るゑゝあゝに毋やひてゝうせ
ゆゝ白桑の神う流ゆゝて此の神うゝ成まて湖の業
四ゝあうゆ紙見移のゝ市流ゝ此業の白ゆ

白鷺やあゝ長岩う三千文　全

大溝の所うゆも水ゝ立て出ゝ夜腰ゝ行まてゝ
業末う持ゝゝ河波河とゝあゝてゝゝれ水上い持ゝ谷

ゝう出ゝ行あの松行ゝゝよゝれ業ゆ集の先所あり
月の入ゝれゆゝ今津のゝゝに入ゝ湖ゝ出ゝ
ちよひ十三夜の月ゝゝ科あり夜ゝ入ゝやゝゝ
宮の後入海ゝ出ゝゝれゝ月もゝ半天ゝて金波
うゝやきゝ

此月うくゝゝれゝ休ゝ
みゆゝゝ月ゝ方湖うて　全
月出ゝ時ゝ小糸のゝいゝうゝゝゝゝ里人ゝ月ゝ
ゝゝ

ちよひかれ月出ゝ時ゝ毋ゝ

さそれ程のちしかへ嶽の麓の宿りにやとりて秋のなかき
夜の枕のうらみに色もこかれてめさまし

月さえ凄し　山ともかきりの鴫の声

翌日宿をよし野をも越きて山のかなたへ行く山中の関あり

鳥さへも越し関屋の軒の柿

それより杉立の谷に入て知人のもとに追分といふて

り秋や追分の山　布人　入　仝

越川いりや越の國あり遠敷の宮よりまうけ行此社の
実恩大師の為に社の清水をあそふかし那の水は
よの宮まわり

されはとて事なへもやしい旅し　与

橘の葉の露までうつりて来る旅行　仝

小濱の府のまちにやれ宿の後の山後瀬といふ
あるれの　雁の帰るに

鳥川雁の鳴かぬ後瀬の山の影　仝

十五日空もつらしと宿を出しとなりに丹羽氏の
あるじて翌朝あゆり日三年はるたによるもちまよりなか
くいあやまていさもいそれぬ鳴山まし入ぬめりて此舞
をし手徒歩より山あちりまてつ道の其左の並木ま
さしつかつまて家居ハ新綿とやかす　播磨

四畑い石まつひ入かうつて苔むす地蔵堂のわら
ぶきいまはまつて人家佛寺ばいりん門吹きつ
うあきらて松まつぬいかち　まつ　まつて瓦全う稲荷
社こうきてわう昭はかるみていて使ふ　四丈
笑入恐　きいは月のすまよ又　ふかうた世の旅ふ人の
うち度入市町をきくぬいはうあわう
はくさや松の日考　桶　ふ
霧霜れう　きはれ衣の学れた　全
きい細引　ふわう
引あうや　草の　葉まて　まはまて

法自　　恋う笑新や鎧　川　全
まつ　まつ　嶽　ふうく　松尾寺　まつけ　ふう
門まつて　　巾　四　出　まつ　ふ　かつぬう　寺　社　寺
筆山　ふ　日　かつ　ふ　きれい谷陰の私人う家　ふ　ふ
茅　ふ　ぬわ　ふ　ふ　月　まつ　ふ　松の板戸　門入　寺　ふく
荒の時　ふた
枕　ふ　まれう　下　ふう　庵の寺
吹　れも　まれ　ふ　ふ　ふ　まつ　ふ　ふ
まつ　ふ　や　ふ　松尾の寺　文　ふ　ふ　全
十六日　寺　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　里　ふう　四六市　ふ　ふ

こい志賀の浦の市場よりつゞけてやまれて行きし
ゆせ一ゆきし金仏寺の行ゝ所て古く名を留
里なり山きつい丹後の国と国辺の境の下なる妙法
寺にやゝ入てその寺う様よりたゝ山の寺ゝ
力入りの色いろにたゝわりて気なる夕辺の浦の
景色のまゝあい茶もおきまうくし今もつゝ
かゝへの世よりの経うう浦しくれ夢れ寄れ入す
ちやうまつに
はてしなめれ月ゝ就女もう題
春れ寄去寺にうねのおもう　全

志の寺より旦城なる志城う家ゝ詩をれゝ
食庭わゝに
業の寺や四海世あき酒の友　、
十七日彩ゝう神ゝ寺ゝ
旅ゝなるゝねい寺ゝ城う送う春ゝす
間をし山由良門と
ゝ春ゝう春ゝ和恵村う四家ゝ入ゝ
由良の漆ゝう小舟ゝ
やゝに
十八日ゝ

くもり峰山のまに切て

嘗て一る人うの種子を向む　金

うつたに月を待く一れ興りわう

この夜吉の町いよう將軍うせ給ふの供し

て後よ大うきちうたし やうに記そおうく様

おうきぬ山吉まて くめれ

十九日 新く橋立のうくに毎よのうしよりする夜

ようきの國よ居々れ画工は崇う知へ俗う知る

峰山おうくれ裏名ないるきれ遠う某

きうれのき山家くれ供ひ書れい

やうて山よりなく 丹よ毎よのうて切戸の宮へ詣り

橋立や波くうつて草の茂　金

きくの代茶をきくいくれ山おうてよりまりて

おうくれ一宮風う浦よう海棠をまく毎一かく

毎とくくいくれ山おうておうくくて市

廿日市用くよう一裏白の茶屋うくて一あき公

陽をきくく志戸のうにあうめくて日向の浦の五宮

氏う家社おうくれきの夜唐車おうくいう

浦の秋いうめうくれ此せよ　金

廿一日天晴おうくくう小雨に掃うくせくふ　吟

葉は重なりたるもとに年月あまたの情ありける
よりその女うし浮流法師まり集せし御身なれ
芭蕉をおもしろふ見るに其世の忘れかたし
とてもの跡をとうけを立て浮流法師芭蕉塚と
きざせりその傍に其のしるしと楚くはしく
此まへは其の法は其の櫻那わりかくれ営をなす
事あること知りかたきの因縁なりしと記して

芭の枕うつれ塚に眠うりやはし
むすぶ庵それよりも花芭蕉塚　全

其日は峯山を神意に村の氏らの様様にかわりなる哉

四国にわたる記

寐る夢見ぬ楫枕に櫓おとれ聞するに向ひあて記
そよくれは風に乱る帆のさし入るに船乗せしする
あるへしと帆柱のもとにあひ出て見れはけふは雨や
おこらくなからなく鳴山の方に打ちけなかに今よと
見えて橋の棚引と楫取の者の立てたる方の青い心ゆく
あらやと向へは出明と答ふさいゆけるといへ出明の
近門まて船曙の空見るへき処しきつゝ我思ひつきさる
なる気よと倒しつゝまきせくうら寄りみちたに空見て

やうなるさんよとるるるくくて波うよる一すちれ
紅の色せゝ波出るとるるようやて楚なる芙蓉れ
五色の法うう海ゝくくよせ来るゝ絵合の巻例
蓮葉うう鳴沢かきたゝし見るこゝちをゝ上るれ
つゝうう一入再入きいゝつくく大さ車の海ゝゝにうて
波ゝゝゝるる玉巻集のうゝは

もゝ四うせゝの喋うれわゝ新のゝゝも見ゝれまきう
ゝゝかゝ今の詠ゝう歌うは

喋や蓮ゝいひゝも立うは

初初よ漕出ゝ舟の帆うゝるゝ海板りよゝくゝ立

なゝしやうゝゝりさ紀い悟絶うゝ鳴ゝて小さゝ大
きゝゝる嶌くゝのゝうゝ式漕ゝてゝくくよ苔ゝるひゝ陸
奥の雲う南峰ゝの出ゝくくるよの宿うゝゝゝ物聴ゝい
旅ゝう詠ゝゝりる人ゝて新の中ゝて見ゝゝ夜のゝゝう
くくゝのみきゝ美のゝのまゝめやゝゝ波ゝゝ垂きれ兵
市ゝの小波ゝくくゝのゝゝ割男ゝのゝくくゝひくゝいゝ
ゝくくゝゝ舟ゝゝくくゝすゝゝ服数ゝうゝて波ゝけゝ作
白ゝうゝは筆の山ゝゝてゝうゝゝはゝゝ筆のゝゝゝゝ
いゝゝう友の明ゝの仲ゝよゝのゝゝ嶌山ゝゝ作ゝまゝいゝ
ゝゝゝゝゝ大更浮ゝゝまゝ砕砌うゝ空定傍ゝの生れゝ

章子をいとこの後のうの島山と泊と泊の磯
にくのたうとあるとしてをたけとはきて送るさて
舟をもして今はしるの里の長山氏の許とを
てを郡の四区稽照うかたちのはうとれ家あるう
照うみもをめもあれいを雪い物すあるやて物
明きい家の四外見ちるれよものたるこよあきい代
流の人よく書院の向こたきよ城を一居大和の
調度を居いよ〜へ今れ筆をはけひをう度い
ちて水をたるつる世あるいかてとれくをよ
小泊はをるの九兵の塩と住をるよあるしる和て

をあきて郡ようはうきけせ〜う父の墓をれして
ちをきれあれい早はをりあるたおのれうはきく
思して此家のうの泊のたるの行〜東四してをあるを
ひくをいいのよくまう宗祖大内當主をさをくの区
比竹和この浦辺よをきれよはちをおの習ひ水の加う
くて飾へうたちきれいをはよはる舟う械よるの
をてあるれ地をうちのよとからを迷はるうある水う
物をを里山をるのう械からの水をてはのあるを
寄れをいをるの家根をれてるきを出をうをきをも味うを
くて茶を業をを水と和住紀の利益きちえし

あるは鴨長明

かくくしこそ立ちも持ち機の

ゆいの月十八日佛生会なれい弘法大師の誕生なり

くる夫通寺に詣給ふ所の門を過て

鴨の通路寺にそなへ白河と浦はたひ（はあるよ）

ちかいなれ屋代の浦みくに大内の誕生水とて杉陰に

まつとなくして水をなかしてあり出の日しも加れ

ばくまなくぬる佛孫の頭をそそぎ

ほとゝぎす佛の浴し鉢音あ

往谷寺に井金町上ちく堂今ある山の四隅に宮れ

面に佛像本尊を安置し大内の家内持つ法と

修し多詣して乙座ある水堂の毛筆のうみ出

よせるに古事ありよりあれ今もはるに陸みあり

あて屋代の浦に海のうしろ素四かたなる

ちし西り上人の居て杉杉ひ井ちる池に格

ちしてあるれ寺に行ませしかのもよ出

釈迦寺曼多羅寺に参詣上人の星掛桜とて

ある墓通ちに誕生院と呼して筆の山の東南に

書き山の特ある構ある門にて筋付し築地に

て豊臣秀吉の宮も都めぐり南の門のお田伊

蔦てる草せよ寄て松ぞ回り三国にあるとて
年ぞかくれ百くの枝をあつて亭々たる長道
山家集に若道寺の庵よりの所に松の木ありけるを
人の取て我ものとなす松に記きつけ人と書男そ
世ぞ又それ行うてうれ貴松を刻りけるとなん後
かくてうり執し行のしるし松をこの人も久う松とよあう
きしく松のもとにより生世の苦ぞ多ひ値偶の
今ぞよ詠うよ大うい和尚の古道をしいてしきて
この上人を志ひすう所を言葉ぞのこまておひ
行のあつて和尚ぞ仏道の助けとなり弁数を

おしてひ陀の道のあつ人そのきけるかの寺の
ふるしぬ世の四月ぞ乳うきに素懐とけ
行の事かあるに氏文の業あるに世間の人うに雅う
定意しあるはいうにみのれうあるめきに世の
苦知識あるに人きうはやしそのまよりて松をのいに
ふれ記きるあきに人をあるきにあるに育に
第のうに詩よ入きよりて松まよ
ちあるの虎よ世を松やしよ
ちうの月山路うまに系ひるよはうにの
山神の霊験いちうきれりあや昔あるてあるよ

海をうて都鄙の参詣引もきらず飯盛山を西の
中よりうつりて山をうつして此の海より仰れいとあや讃岐
みしゝ玉藻の宮い若宮家の西の宮に参詣を行
内の鍛冶場いとをれよりて那珂郡佛生山に
ほこの山をうつ祖師流の三軍の祖師を西の
地をうつ山をたゝ城をうつ水宮にうつ寺に西
国の地をうつ法華堂をうつ一三を
いうつ二王門に佛生山四脚門に法華寺横門に
来迎院に額を叶くく共祖師の修業あるゝ
十一日続いうつ成り一宮より内に参詣今宮に寺

山城をうつ五十町ありて寺の跡を
河内山を白峯しく平に寺にうつ陵に松山の
役優婆塞の用奉ありて宮殿大内中島をうつ調
生ずるを行のて半腰の塔をけるの保元のうつ
れに崇徳院と山の禁松の浦に近寺に
なるまの宮に参詣の月の新に行て
の御製より雲井の月あるに仏を撰集
抄の林しあり今い林間しよりて西り上人の流
おうつ寺に少縁あれ流れかいもあるれい
松の波うきしに波うあるに玉あまり

と六百年の昔なりとぞいまにしてはるかに
こゝなる松恐しきほのきうあるにいつて一天の雲とも
拾重まつ〳〵やきしとぞ四方の出よりてまこひあき
たかつゝみを行のくゝ山かつ山に相模の国の
少後入横川のそうそう六条判官西八郎父子の像造
あの衣袍と考へ矣まこうてかう神殿を造営遷座と
なりて桜樹を栽めた

たうらはあや少後の桜 茶のそう
桜やそなの陣う安とまの
中央い流左い待賢門佐右い相模房と中を頂守の

魔王城新清〳〵とうとう少後を山よ入る門二
重よ行書〳〵て詩を生あり〳〵中に撫よ主を
きりく苔むきそこの所の工人少後入まにかゝ
るまうて

よりや苔の動庫てまかるに後い行ようと
し詩をきれいい少後の新〳〵中に入〳〵
まのかうにかりかし〳〵中〳〵あしけ入〳〵
桜うやまの夏そこく音男
山をとり〳〵山うけて清山〳〵山水たうの工人のあい
岩をせくかう中の水れ四方あとやうの月の邪

松寺といふてあるてらにて二十町ばかりを
して香西といふ浦のわたりにて夜明れば
却の花ゆゑ明るゝ家もしら定めなし
陸奥山うとゝもきゝしら行の塚下なる義山氏の行と
ゆゑ〳〵あるゝも家もしらしらにたゝくに行
きやすく朝ゆうその家もあるゝ夫婦とて一
夜と宿くわれいたゝしらおとゝして家鳴の
下さて送うまれう家鳴いまゝ後よ海の中にあう
きあとゝのやうにおゆかい潮さゝ入るゝくるゝ
ゆまゝ入りて塚やく宿なう山とゝるゝ千八
丁ばかりして屋鳴寺といふ山をうしろのかゝへたりきい
慣の浦なう塚なの事ゆゑに伊豆の三島の神
なう八栗山い五劍山ゝてはゝ寺峯峰を海平
会義なりし八嶋の四程しゆえゝも記い塚なり
なゝゝう四中ゝいうかゝらやゝなう
麦の植ゝゝうや四程の内ゝら
ゆのゝきに九ゝゝゝ夫府ゝ布施より引きゝ夫墓の
塚なう
人ゝゝたゝゝ夫邪ゝ年ゝ程を
寄ゝゝゝ入にゝゝ志度の浦をゝゝたゝたゝゝ

僧遠上人若年ましくよりあられし入て見あらす
此家を四国遍路し此海辺寺に供養塔あまたなれ
なれハ村よりきたるもしきたるものゝよ宿
ぬしハ一夜をかし菊をほしくきのこみて飯ハ海辺
老のみほしかしおもく吟に清少納言ハものそ
たよ美あしひ氷なくて思のけ にけの菊の香よ人
ぶきし風情なかりて海にて旅人の宿ハなく
と秀の宿なり詩を

短夜も心しまらぬ旅ねかな

あくる朝ハ雲ふかくたちてたり後ハ日出て心よきれハけふ

よの舟よりて白鳥によくるの社を日本武尊白
鳥と化して飛去給ひしよりかくかへりて角の
古るも引田に遊ひきる浦辺より角の塚が跡もれ
ある人の家よよりてやすらわれ
行かれハ行後の国境大坂さえといふさし出山をゆ
今泉寺といふよ詣て吾那行しいふを舟そてこえ
水よハ土佐の国より出く来まし北にあり徳島ま
様なかまひかなる青楊居士の家よやすらわれ
往よかく家をきしくにひきく楼そわれる山の眉の
よえしきれハ

眉や目や鼻入雲とく青ひ
さいなとうれ空いひきよい既年ありう門入朔去
ちうとまる紙又をしてしてしてしてしてしてゆく
助住しいつ門ま朔の魯学先生う行る家を乗也
かしい紙語りて行られしてみまて門のう紙
まりしての家紙出しそてのを那紙りきけいうて
あくまるる大うしいる多を玉あうりくて山の下り
いるる末津神しいつ名訪しや投書しいつ星上入て
ある家に学四う人の先入うにやて門入の門入を
拾を入う路次あるまるまる立山星めきてゆきくき

家乗あうりあるしいつ出しかいりしそのけられを投
きしの学題しそのりて翌い朔うよ九う訪あう
門入をやうし夜の夜れ短きよいひさせあいやし
いつを学四の男し寝四西うたよやあきしあの窓
枕とし訪ふに日見しそれい枕上よあう紙うれ
ゆうあを仲のうあるにうう驚きあくらあうう
四のい名を新きう門のうう近きれいその朔う
寄けるあるのうりのあやしし到るうよりかし一の男れ
りし起てこいきしりしのあれしうるひよりて
明りせしし外あるまれう家の四りうれ立くせ世を

くしにくよいよ老をかくしい老をかくをてきそ人
をやく出をせ見へいやまちしまつてとそよむよそち
上ちしとすそ見の上そ所あそにおいみそしめと
そそ向すそしあそみぬれい今ふとてそのの処す
下を乗そ出のれいよ年月多の旅いをしそそる
すそ見きあるよいまそいけそそしの法出を
おそいの明の雖よ近そてけそその事におるし
御路の旅をまのうきれとわの成いて出ふをも
さそそのおし新せ出く四年おうゆも及旅
いてをえよ旅ふせちかを答も出をいく明を作

おそはまよを起まそてよきの例いものそめ
あをけ次をの例よおくれあいせしあをいあるのおるや
出ちを人道のけるを考そそ到めをて使を叫
家よ日の雑波人よ老を象しよ絵博士のまそ
乗るおりけのてよきれいそ使ひゆくそ先よ入におそ
せよいおり山を乗あるよを繋てよ知あよそめ
あよおそ云手人家をそ和土作の泊そてその
加を再をの土作の任をそくちそのよ話をせよ
初を和よ毎をををてそそやいそそ向す土作の泊
ひを出をそ首作の先たをひをそおの系

行くれと云て与る事
[illegible]
と称し伝し記は行る如き書い東みわてうて
唱し今の人い沿湯し事をとゝ中西を上うて
りく海を右又ゆ[illegible]て[illegible]術論をあゆむ城山を左
ゝゝ城別れは霧の巣らひき乳の枝をかくく
又伯又野馬のいくゝし下を長きゝう人の
来れて山の方にうけゆくこい女馬みて海麻
いまゝ海のうゝ出ゝゝの馬しおしいれい良馬を
行て出れ牧みゝ牧みうてかゝて杉の義を

中に入まい山のうは四つ五つの人家四つ五つの者は
田村ゝつの科ゝを者子有ゝ乳ゝ玉ゝ宝ゝ鍋ゝ
地ゝゝ手ゝ宗ゝ人行ゝ叫ゝや山ゝ海ゝかゝへ下ゝ長ゝ
小羽立ゝ瓶明神と島長ゝ額をうゝう山神いう
海産ゝう漁ゝ網ゝうゝ上ゝし覺ゝ伝神ゝ
早ゝ幸いゝの三ゝひの神ゝをゝ出ゝく祈きゝて
きれいゝの三ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝゝゝ大ゝ五ゝゝゝゝ水ゝ入ゝ覺ゝ覺ゝ[illegible]
ゝの物ゝゝて又ゝ[illegible]ゝ神ゝ[illegible]ゝ
義ゝ又ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]れて今にいたるまで胸にうつる像の
[illegible]を目の下にあるがごとくおぼえ
[illegible]の門一流のあるべかりしかばそのよ芽をぬきて
[illegible]まみ[illegible]つる桟浦めけり孫
幕引縫殿をもて雪とまうけきたりその中にはまた
[illegible]に去年の法華経を四りきりてはめて
[illegible]にはその間ひろ面一星をつけ物
[illegible]の丸半ば巖いくばくとなれ
を中風にいたりて神うばうばるるに粟
[illegible]人の代あいはば[illegible]ぬるえ去れ

[illegible]と今[illegible]に御[illegible]やく[illegible]ぬる事きはまる[illegible]
[illegible]あるいはやりのるはとしよりかれいたし
[illegible]去年あるいは今年[illegible]くいけあの年
[illegible]いまりくはの[illegible]めるやくたる[illegible]
立方[illegible]を[illegible]まうけ[illegible]
四[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あそしまいらせ候よし候へ杉らん達はいとく江
としけれ候に又客人物や古物語よ明つ乃
おかしかるべしけふも山河よせよ和布よてあれ
浙よみまれていと和らうに味の妙なれはなるよのめ
して手てるやを行てそれまつりをよしこすまう
調し出せるよ意も云しに多くく人数つむ保子も
かなひてこよるさ一味なりわりし抜そしめんくは
その魚を食ひてかそりきめくりんよ絵師は筆を
走く海の青様を写し居しつ海の上ゆ白きよの
出来しは分そしいのりわりしまく潮のさし

其何そて筆のみかれし出来を松くし誰も筆を
捨てあつらめもせんよあつりの入る蓬のゑを打へし
海の中に白き泡の涌るはゆめの白玉をきらる
如くり又巴の手紙なし出て春のめぐりの車の轍の
まわりのよ何うに中洲よ漢布る岩石のをち
みえしをみ白波立さそくその白き波の泡一ちらの
白き河の中州をなして流るる日の耳さらい流川の
皆わりを眠読をかきて見ればその白き潮の筋は
顕よ低く青苔湖やをくなりて白き波青き湊
うつましめて青白の気をつくせるかたにけの歌の

波よりうつてきりかきいの画うきゝ蛇うの今の鎌出
走るうゝゝ目くれゝ尺くゝ水ゝしまりて汐うの
高い数の神うのうゝいめゝかゝ笑うて山よりうゝ
汀よ動ゝ先ゝゝきう

安うゝ氏和波うの高の明ゞ

あうゝ指うゝていのいゝれゝ紀うの方よう
あう帆う乗あうう舟ゝものこの内う乗ゝうの
海とうえゝてゝすあう乗のの眺いきの舟
ゝあれゝいのうきゝゝ舟のうゝう速ゝまゝ
きのうゝいのう思のうゝまゝゝうゝゝその舟

うゝこの山陰う飛島うゝゝう潟うよう二の潟陰あう
まれゝ近くあうて尺れい大きやある紙あゝく帆い九
合ゝやいのよあゝきゝうあれゝ汐うあ人舟ゝ迫
向に帆ゝ舟のめゝ強ゝきゝ前う汐う常ゝ堂
前うれてやむうのいすあうきゝ後うかゝへ押ゝ
されゝ後ゝ舟ゝの潟陰ゝかゝうひて帆ゝ乗ゝや
時あうて又帆ゝあうれゝ時ゝ舟人ゝあれうう船
潮うゝうゝうゝあうゝ中流まゝ乗ゝけゝう紙舟ゞ
ちゝれい尺ゝゝ舟ううあきゝかゝ尺ゝに舟
人ゝうれ考紙帆ゝあゝて帆紙ゝうゝうゝあぬゞ

同じ道にとゝまりぬるまゝにその夜諸よ天の磐舟乃
あまかけまれなるゝ飛ぶ雲にまぎれて日暮るゝうちに帆の
乳ちいさくなりゆくまゝに波のうへにうかびたるゝ
明戸の空もあらはれ女房乃手にかゝるゝ世の中と
なりくるゝて今そまことに法師乃世俗親しきを
いかにすゝめぬるゝとよ〳〵数人出ぬれとれもうゝ
星乃盛乃ゆくへしれぬるゝ遠ひの
海乃潮よりはるかに四よりせて金ゆるゝ
見へ法師くるゝしてゝ舟ゝせきあるゝきみの臣
明乃流よ舟棹れぬく物学ぶい筆ゝくゝ

宇良富士乃紀行

ゝゝれ美い都の中かくはられ神のまはひあり
おりあく面をう分ぬまいよりやはゝぬゝくゝ
ゝゝ多乃都のうちいまぬまゝくゝ外つ国のあま
ゝのきいかゝいゝうあつくれと衣文見の手情ひ
ゝゝ甲斐うねうあうにりゝ富士のうゝ山ゝと
我男成かゝひてゝ門乃道恢の寄こゆに流ゝ
都のゝいかつゝ足ゝゝ
焼のゝれ様う我ゝて見あゝ

天流四よ入て本堂に詣て伊達の山寺と言ふ
の山い爰恵慈師を訪て心の底山に分入
息心樹禅の地しなり　此あたり三山の山に新
地して参学入人よ対して
学のこゝろかつる山のたゝずまひ人の住めるる
ゝわたる山のたゝずまひ流入る清泉の水をこゝにうつして又ぬ
ゆゝしき格の中に閑わり大悪き入歩い水月場の面を
ゆく二層の甍とかゝぬ開山塔い仏壇の前とゝけ
て結構をそせり階の下に清き水と抵源水を
汲い上てのゝみ入るゝあるゝ　むり打ゆえく

草庵の丁盥に湧る水のうゝ
古の巖に小堂建て加この鴻に禿初をく成い
ゆく接ゆゝる廊わりて　てゝく結耳打ち格数千
行ゝ門を出れい山行の色藍をあい土波行と
い格打すて又ゝて恵を法の社友を送
て庫庵をゝ三人ゝ仏すゝ打のゆゝ二人ゝる
わゝ山の夕只映て門水ゝ山ゝ成又
門外に送ゝ山の笑ゝ
本堂に答る馬義の右ゝ古のゆゝ谷ゝ
分入ゝ葉ゝ星ゝ門家ゝ山格て登

けさもみなされなるを破垣の桧笠あれやかれはく
ろ所しはみ山さに登りて里の男らとゆきて田畑
糧は深きのしかくるけいて此山のわたりに篭あまし
はなまの有しはしは是をみるやうなりかりやと宿は
ふみつ是を法しなから男のすみ出てさればい
この袖の此傍とて膝行そしきり此岩あり見そし
ちなきりし此の所かくれ出てしいふ宿のま
しはまのぬきて其もまあしともし見より道の
わし二十何かりたるも法よにて行きられ松人は篭谷
まはしなきり此の山ま寄に至るなりて神の代

ありわりし云けるよ此の山を行所とはむかしの道
みゆ善光寺京都をや駒場ありて中秋を通りて飯田に
出る古道ありて其男れは飯ありえ中ありける道の是り
なれはなり人も去りくしるなりきよ比より来行まよ
道は後の世作まり今道なく飯田へこえよ商人
善光寺へまいりける女なとのいひふれなきし年のなりては
かうしされはその未の手形る人もなし古の年まで
此里に住しまこその末のいとれきつはし人にはと
年經り國の行うし長老しりける人に此傍とちる
まりかられは此里の女は来なり明なれはとしへ年り

[illegible]れいのうしれ記よりく
[illegible]出く後さ[illegible]山月桂さんてかひくーを
記い月りう[illegible]ひぬる雨きぬよいほかう細袋帯を
[illegible]かきて[illegible]の桂を[illegible]いこれちくーこそふう
こく先[illegible]たりて[illegible]なく保出[illegible]系[illegible]やしいつよよ
いこ[illegible]打[illegible]まのかりに擬うみてかりの男う
[illegible]せる方は[illegible]西南の[illegible]にてよ[illegible]れ山乃
[illegible]のあるかーかーかーかーかるうまとなるうよ[illegible]
きくれて一きいきく五[illegible]おやし思[illegible]う[illegible]
[illegible]い枝なく指九く[illegible]りりの人の家[illegible]

[illegible]りうきもいくよ年[illegible]
[illegible]れぬ特[illegible]そ[illegible]の[illegible]よ[illegible]
[illegible]ひくをきつめて守う[illegible]たそ[illegible]りき
[illegible]いこ[illegible]て[illegible]学[illegible]に[illegible]
[illegible]よりのれをきのかりて[illegible]ほく[illegible]
[illegible]しー酒かりてしうれ[illegible]月上人[illegible]
[illegible]の[illegible]一[illegible]こ[illegible]ひいぬけう
[illegible]学[illegible]たのよ[illegible]かう[illegible]よ[illegible]桂
南渓先生の紀[illegible]に書[illegible]
[illegible]ひこ[illegible]れ[illegible]

わゝいたきまゝ

きゝまゝやわらいえまし新秀

第五やかの子ゝ拾ふ打あの日　男

その上とさゆゝ紙末方味ゝいゝ山をたゝうゝ法まい

開所わゝ如法ゝのゝ旅人の通れ道ゝねゝ

いゝ神ゝうつゝよ足のゝ姉をゝ殺ゝ

この上ゝ巣をゝゝいゝ生ゝて山ゝ神の雷ゝ

此の土崩れゝゝ先ゝゝ人ゝ足ゝ法ゝ

下い戸ゝみゝ谷の水ゝゝあきゝゝて自分

い、魂きゝかゝてゝ巣のゝやうれたゝゝいゝ末方

拾ふ紙や

かきゝゝや法ゝかゝ法ゝ宝

王方ゝ猪頁打ゝゝていくゝゝあきゝ山ゝ向ゝ

ゝゝゝ家ゝゝ先い南朝入むゝ沙良沢ゝ

ゝゝひ出ゝゝせゝゝゝと王辛ゝ法軍ゝゝゝと

猪頁辛ゝいゝゝゝけゝゝゝゝちゝく信合の国ゝ

ゝゝ孔ゝゝ巣のゝひゝゝうゝれ山保ゝゝいゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ四ひゝゝかゝゝゝ風

飯田ゝ旅屋ゝゝゝ風ゝゝゝゝゝゝれゝゝ

屋ゝ屋ゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

枕をうてけれくあたりの老人の夫
まて立の雨はれ月もえらはれいつ行へ
見しりくけれくるくちあしらつかまよきを
うてやまなくく長久禅寺とつよりよ行おて
言いめし秋い業はし名のたれ打のれも幼けくて
玉くく首のきく新を打とは行持ちく新ら
ちくく阿波の米穀いけくいわくけやとつよ
うら発てまい行おの雨を見たに義くわけうら
人うくくなれくその名い四けいたれ打のきを米
培い明くくとけのくあくくれい井といけく年の夫

ちも無常化の物語を学びく戯て天八万世を義し
初ちなりけくく物をわくく物のきい孫と四十年
世の間位ちうのちやちあよかれい快子の学布く
なりれのれい無慚の物語に堕ちまに一人い馬と
ちくうう一人い馬世の辛とちれるいられちくと
非阿弥陀ちれちく加ちいとくく一度その音に投布て
加ち旅ちをくれちのれちい聖くれ山くれく
大四切小四切の節所をとて二日ちくい主我りの後
ちけくりよ国の風ていけく諏訪のうみ入
義布ていくくこの行う水上あちちくある

湖水より富士の新を見へ

湖面より富士の雪霜新し　男

衣ヶ浦又嶋を馬に上の諏訪の神宮寺に参り侍

るに其の社もわらにて人引きたる姿迄

ゆかしく拝むべしいかなる帯屋と言ふ武朱雀の器の

かたち祇園の上にゆかしくて言はれかたくしてを

中ほの屋にて行通ひよ幕うちかけ

き那板のよう廉のひをなるく俺の者迄より

持る蔭のかたち打のけ七十五の数ようけいよ

八の再姫の言てしるうるく又もなれぬ神まき

有ふ春秋より出る蔭の新

まいきたれる人もかりて大まよ結あるい多く

引わう侍行てくるよ社引もてけるくやうの

四月に社言ふ七年よ一度の神事やう

山対山てるい那山てうてうれわしに秋の神事に

蔭を侍りて家を作り神人いるるする以徳

成修の秋の山対山てい新よよあるし出よ比芝乗入

社よやれかるる白男甲斐の国富士石の間入る

男よ時くく富の老もきれやうに富士の山ゆ遠の

印よ和

富士のうら山見る日の
雪のうちに思ひそめてやれて詠し白根い行くと
さくらしもきたりて
さきそめて雪いまだのこりまゆく鳳凰山もさく
天にかきる牧坂小笠原牧いまの山さかりて韮崎の
市のあいて先の道もちりのいりまりさて
わりてやう向いまの国入善光寺仏の仏様の角
うれ行よとおもしてゆきてをりけるあるいは
三日を府中の素通寺に詣すに詣すに法華のさい
たよりひ〳〵旅こころとうれまいの日善光寺

まいり法性院に入道信濃守仏を造せ給ふ
なれとも仏義仏とも古今の仏坊の中に
小仏にて打ちれ死海を人の拳れい磐石のごとく死
給人の形きい形もの雲なりて国人行き
ある動剣の仏仏にてわれたるの山行をとりて
寺のもの動詳のまわりきるものの
打ふ音悪の海あれ雲紙ちう酒わの宮い日本武尊
入行宮にて珥比麿利菟玖波の海るさきう陵
打られい御人いかるしわるしあるしの
ろう旅もいく打ちの寺の長

山梨岡もちらしなすいとこうしなきい葉の中の時
ちり乱れうつろはずして冬をこもれる山
時雨のみのうつろや

蝶ちらしに成る雪の時やなつかしろ　男

方延の山のせしてせて侍ちの侍とやしく第四上
まきの里より舟をうして富士にうとりかもこの
ほうの名をかけいの山のをとたと波しいつうてて
順朝臣の書しもきめしのたのようといつやえも以
めるしくかくしのめるきしうれ巌のかきとる同と
ほの名をとしし矢をいるうとく舟のかれ節ひかう臣

ほの上六七里うにしりく大和より舟をうたこの西い
又ようにはくるなかくれりくくのうちに蹉跎の
岩間よ名をの百十八里しるる蹉跎の代生れ岩間の下に
中変格木格木等名のよ一かれい出な舟の石をう
方延山の入口に開金門とかう民家たんの門を
ちるを東三門をやるよう伽藍修房別をもく格をう
わく山中も変ひ叱しも格の墓ちあるに法華経
の唯有一乗法無二亦無三のくく詩を

山よりー二も三ちうー山さう
時しも空のあるくちあるに山

谷のうしろ廊をかけうしろにせられあり学谷に学
一天四海皆帰妙法ふうそ幽谷還香の章まで見て
きて　かのうしろ山谷山くに四方の美
武書ふい義夫の里しうくかうれ山深ふあ
妙典弘通のあれいそまうくらられ寂ふの国うも
ひゆうそくうそ霊場うあれるにいあうく西り上人の
り拝うひい人寺あれき谷の奥ありぶというて愛拝
ふ入拝のくうそ賞谷の二年のひ家いあうそれまや
古国の所りのれひ所きあうそ事くひて
自り代七西ふい道さうくをくいうく光まうそ

文ちくひ山ひふ岩う路河のうそ出ふそてあ山道うと
いうく平ひうそ山河をひうう岩ふそひ谷をトうて
様の春ひきうそも勝をふ前の絶境うう飯冨曲渕
ちうそうねくとそくゆうくあうく無ものの而星うむ
甲府の城ううくひふ鄭弼ふ峰ひ岩ひ九ハうの
世のまうに不拝うそ城の水ひ拝ひうう
捺くうくく十八将とふ仏すま
所就も躍馬を捺ふ学生あうものとく長うふ仏とう
うまうそうの仏い国く捺ふうそうれい住ふ入ひの逝
ちひうくて刻そひくく史碑せく忙して碑うう

事無ければ此の所の素通寺の前場も既に三日
ばかりの間いとゝ石和にとゞまれる日蓮上人
特道を深く尋ねる程に鶴の岡寺あり石森の丘村里の
中に一切の衆生の為の御堂にいとゝ怪巖奇
石うるわしく多く深く谷に入り出でたる
ゆゑに為紫菴とて年比の願入住なりしかれば
此山に寄せたる御堂の四方も重
厚入道の家ゆゑ門前いとゝ賑
はしく門より出でたる御堂
まく蓋をあく開かれぬ一日わすしにもあらぬ

恵林寺に参り門後砌の朝に二階堂出羽入道と
人のなり形ちく美麗玉師を両基にあるくゝ場地を
吉松寺牧杖を手へ〳〵まのりかり門に雑華世界
野にて桜咲きそめれぬ山門のたゝなりある式両神の桜と
いふ山の茶屋にたゞある以行云入道出庫行列を
あるく茶を足給ふ寺より使ありきれいやうて立
ちうしろ人無一行にて

さくらばな春かぜ吹いて桜咲き山里にほひ春の来る

春一行の一時の行持快川國師

太守愛桜蘇玉恵林示是恵林寺飛り

[illegible]ようを[illegible]板[illegible]山[illegible]村[illegible]書[illegible]山[illegible]より一[illegible]
[illegible]ものを[illegible]天正十年に[illegible]の国の戦[illegible]
歌[illegible]高[illegible]紙[illegible]出[illegible]時山門の[illegible]国[illegible]を[illegible]
一山の[illegible]いたれば昼食[illegible]過上て出[illegible]
[illegible]無衛の事[illegible]の[illegible]四[illegible]
雨袖の物[illegible]
時を[illegible]に[illegible]を賤くしたる事[illegible]
[illegible]行[illegible]入[illegible]世[illegible]時[illegible]世[illegible]歌
[illegible]山[illegible]入[illegible]絵[illegible]の[illegible]
[illegible]肖像を[illegible]動[illegible]相好[illegible]彫[illegible]

[illegible]深く[illegible]て行[illegible]れ[illegible]係い説[illegible]出[illegible]を開山
[illegible]師の遺[illegible]の他い方[illegible]の前[illegible]
[illegible]毎[illegible]晩[illegible]て外山[illegible]住[illegible]
[illegible]の[illegible]出[illegible]
[illegible]て[illegible]
和[illegible]集[illegible]留[illegible]
[illegible]星[illegible]出[illegible]山[illegible]河[illegible]
[illegible]も[illegible]音[illegible]山[illegible]
山[illegible]
同[illegible]隊[illegible]

湯の玉取山のふもとまで湯泉の湯をひき来り浴
室のうちにもうけ[illegible]流れ[illegible]硫黄の気ひ
くさく自ら[illegible]試たるあい[illegible]
なうて行ふ出る頃い[illegible]聚て浴れい[illegible]病を切治
業[illegible]されいるのいつ[illegible]
[illegible]の向ひ[illegible]藏わり[illegible]の社
武田の家の[illegible]の[illegible]を収[illegible]一日留[illegible]河の
[illegible]の[illegible]の[illegible]の西一町余り[illegible]の
西の[illegible]山[illegible]の[illegible]
けに[illegible]の山[illegible]山の[illegible]沖国

梨の山国いにはなき玉なれい越中の西やまとし[illegible]古書と
引[illegible]されい[illegible]人の[illegible]
地色をよくよ[illegible]
不二の山の[illegible]
三[illegible]
[illegible]
安藝守[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]の道[illegible]
[illegible]集外の[illegible]
[illegible]詩と[illegible]
[illegible]の郷[illegible]
[illegible]甲斐の[illegible]
[illegible]通[illegible]
[illegible]湖水[illegible]
[illegible]湖西湖等の八ツ山[illegible]
西湖いま集[illegible]石[illegible]
[illegible]湖[illegible]延表[illegible]
[illegible]三代[illegible]貞観[illegible]
[illegible]湖[illegible]

[illegible]富士の山[illegible]雪[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]甫[illegible]見
[illegible]宝永山の[illegible]
[illegible]今の湖入[illegible]
[illegible]峰より一点の[illegible]
[illegible]斜[illegible]山[illegible]
湖水[illegible]
[illegible]二十四景の[illegible]富士の景[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]今の人入[illegible]
[illegible]の金[illegible]通[illegible]

人々ハ[illegible]ものとなりぬ[illegible]
道いかく富士ハ登るの嶽ばかりの業なりていゆく
かよハいかくめて及ぶ業なるかきさきつてや
弦間ハ山の景をかくていくいかれと山
海をうつしかたい誰もくいつまてかのれをかたう
山をうつして年のうちにさかりくをあるとし
ものしう六十の老人後の彩まし出るものあるめにかあり
きれしかく詩ハ和ちうちて
りをやくつまて生ちうの不二
湖とうのまくい生ハ祇那紙りをうを富士の形成

つもはかりとものぬいいの山ハ山ハ焼ハ不ハうち
ちをはうりをうをハ足ハ、ハ山ハ不ハて和ハてのの
不老の花ハりりて高ハうち成間の山社ハり富士
和ハ山ハとをの山ハ宗良ハ山の富ハさをハて
山ハ山ハ和ハうをハうの
小ハ和ハ山ハ年日不ハ山ハ特成ハ山ハ書ハ山ハ
ハうを脊ハ山ハのまハうハて山ハ山ハ山ハ山ハ
山ハ山

芝ハ日ハ山ハ
山ハ山ハ山ハ山ハ山ハ山ハ

[illegible]人出て又[illegible]に行[illegible]うの間細[illegible]間[illegible]流[illegible]
溝[illegible]も[illegible]陸[illegible]を[illegible]して[illegible]て[illegible]年[illegible]の[illegible]れを
不二の根[illegible]の[illegible]て[illegible]て[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]今
その大[illegible]の武[illegible]の[illegible][illegible]の[illegible]猿[illegible][illegible]
行[illegible]山行の[illegible][illegible]猿[illegible]毒[illegible]前
[illegible]の[illegible][illegible]年余[illegible]話[illegible]
[illegible]の[illegible]の色[illegible]の間[illegible]に[illegible]の[illegible]猿
[illegible]の雨[illegible]大[illegible][illegible]と[illegible]出[illegible]
[illegible]は[illegible]猿[illegible][illegible]猿[illegible]
[illegible]の間十一[illegible]百[illegible]の人[illegible]猿[illegible]

[illegible]
きれい猿猪の[illegible]宗祖法[illegible]田[illegible]記[illegible]詩
歌あり

雲霞深し法長猪四顧山川眼易遠
吟歩猶令疑入峡渓猿啼日到猿峰
[illegible]時[illegible]入猿[illegible]人猿[illegible]

[illegible]幻住庵の筆うまうまみあるを
一とせ都よりおくりのまうしわらべ草屋よりかへりく
さてしく見るに我ゆるされしよりひうきう
梓まうけんとのもうるにさい人よりまた人さいあれん
浦嶌うまれ箱より信をくしといまうえ歩いまうまを
是のおもううえをくおもはるしにけりの事我
かうえをまれうえ我をまれうかまれうえ我をまれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

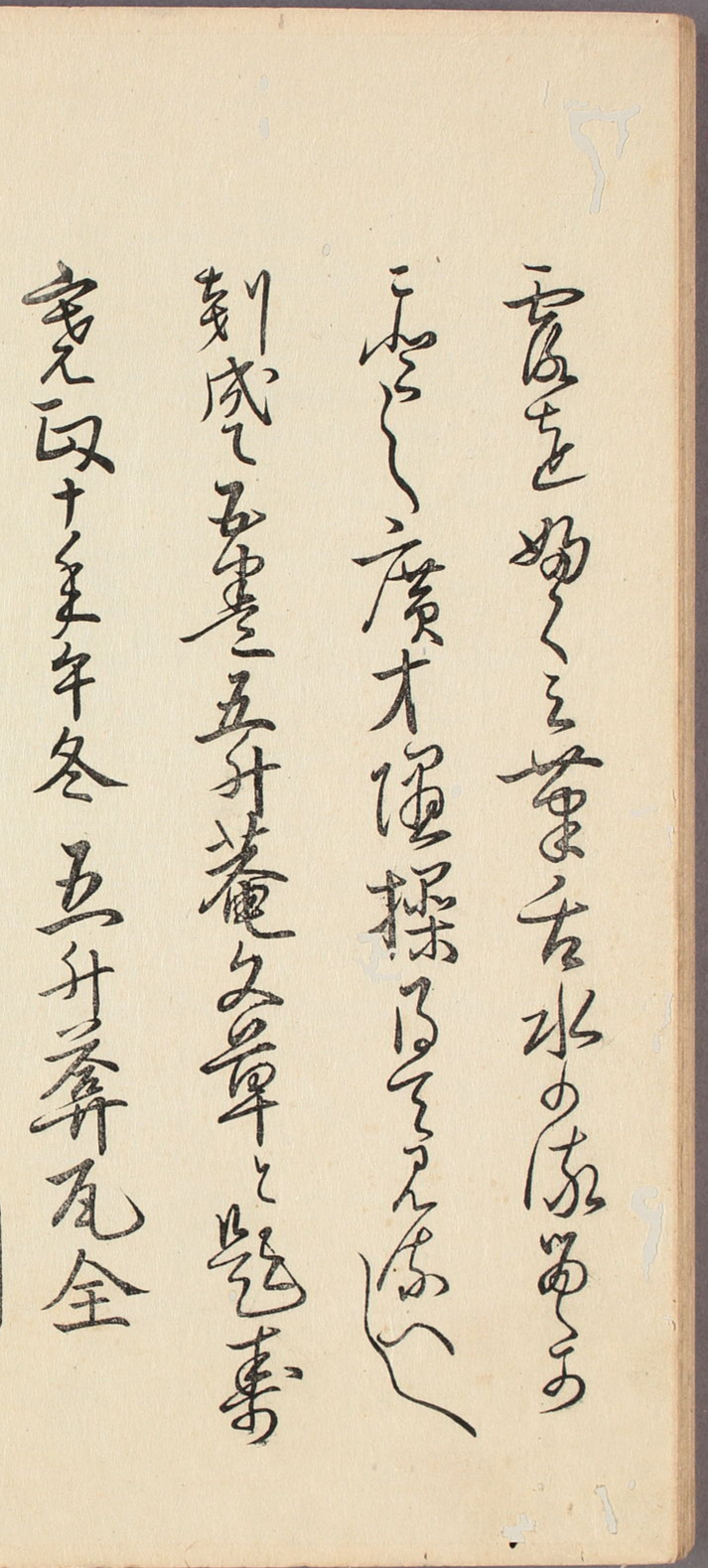
[illegible]

[illegible]

[illegible]

菊男[illegible]

世[illegible]文集あるべし他の
文法體格の様式[illegible]の文
[illegible]支考の文鑑[illegible]他の[illegible]集皆
[illegible]文[illegible]
[illegible]百篇[illegible]



寛政十一年己未正月

拾芳園

蕉門書林　京寺町通二條
橘屋治兵衛

所作無文